

「ノン・サンスの世界」(四)

—アントン・チェーホフをめぐって—

中村雄二郎

IX

一八九二年のはじめ、チェーホフはモスクワ近郊のメーリホヴォへ移り住み、一八九八年までの間、ここに生活の根柢をおくことになる。かれは土地の農村生活へ立入り、医者として農民たちに接したばかりでなく、「ゼームストヴォ(地方自治会)」会員として社会事業を指導し、また村の学校を管理し、さらに自ら学校を創立しさえした。一八九一年末から九三年にかけてロシアをおそった災害——大飢饉とコレラの猖獗に際しては、献身的な救済運動を行った。飢饉民救済のための基金募集にはモスクワ時代から積極的に加わっていたが、メーリホヴォに移りコレラの流行に直面して、かれは文字通り身を挺して活動した。「わたしの受持区域には二十五の村落と四つの工場と一つの修道院があります。朝のうち

外来患者を診察し、その後は巡回です。馬車を乗り廻し、ペチェニエーグ人たち(野蠻人たち)に講演を行い、治療に従事し、腹を立て、おまけに自治会が診療所組織の費用を一文も出してくれないので、金持の家を次から次へとしつこくせびって歩くのです。やってみたら、小生はなかなか優秀な乞食であることが分りました。……わたしの魂は疲れ果てています。退屈です。自分が自分に屈しないこと、下痢のことにしか考えないこと、夜毎犬の吠え声、門をたたく音に「自分を呼びに来たんじゃないか」とふるえあがること、乗り心地のわるい馬車で不案内な道を行くこと、ただコレラのことばかり読み、コレラばかり待ち、しかも同時にこの病気に対し、自分が奉仕している人々に対しても完全に無関心であること——これは、なんですよ、誰にも喜ばれないオクローシカ(ごたまぜ料理)ですよ。」(一八九二・八・一六)

スウォーリン宛)

二十五村落を一人で引きうけ、連日馬車を乗り廻して診療しながら、「自分が奉仕している人々に対して完全に無関心である」——手紙のなかでさりげなく書かれた言葉ながら、なんとというきびしい、そして大膽な告白ではないか。しかも「無関心」こそはこの救済運動に素材をとったほとんど唯一の作品『妻』（一八九二年？）の主題でもあった。

「社会問題に関する著述」に専念するため村に引きこんだ退職鉄道技師パーヴェル・アンドレイイチは、この二年間というものの、妻のナターリヤ・ガヴリーロヴナと二階と階下に分れて別々に住み、食事も、睡眠も、自分の客の応対も、彼女はすべて階下の自分の方ですませ、わたしがどんな食事をし、どうして睡りどんな客に接しているか、全然無関心であった。」ときたま階下の廊下なり庭なりで顔を合わすと、二人は愛想よく笑顔で挨拶を交わしはするが、そのときかれは彼女の顔に次のような言葉を読むのだった。「あたくしは貞淑ですよ。あなたがとても大事にしていらっしやるお名前を汚すようなことは致しません。あなたも賢い方だから、あたくしの邪魔はなさいませぬね——これであたくしたちは五分五分。」かれは、愛などはもうとくに消えてしまつて、真剣に妻との間柄などを考えるには仕事があまり深く自分を擱んでしまったのだと考えようとした。が、実は階下の妻の一挙手一投足にも無関心でありえない。そのかれのところにある日、飢餓民救済の助力を訴える一通の無名の手紙がとど

く。この手紙は、毎朝どこかの百姓たちが召使の厨へきて聴くことや、一夜に二十俵もの裸麦が納屋から盗まれたことなどと共に、かれの気持を動揺させ、不安にする。

実際、おれはなにをこんなに気をもむんだろう。一体どういう力が、蟻を火にひきつけるように、おれを飢餓民の方へひきつけるんだろう。現に、おれはかれらを知りもせねば理解もせず、ついぞ見たこともなければ、愛してもいないじゃないか。一体、この不安な気持はどこからくるのか。

しかし、ともかく、かれは「この郡ではわたくし以外に一人として飢餓民を助ける者はいない」との確信から、一切を放擲し、ただ百姓たちのために心労することを決意する。と同時に、飢餓民救済運動をきっかけに、かれは妻との和解、あるいは少くとも接近を企てる。「これから開くべき真面目な事務的な協議には、地位や私情に関係なく、誰が参加しても差支えないものである。としたら、ナターリヤ・ガヴリーロヴナを呼んではいけないうか」と自分にいきかせながら。ところが、ナターリヤを交えた協議の席上で、たまたま、ある地主のところでは夜中に納屋の壁を破つて裸麦二十俵が盗み出され、その地主は早速この「犯罪」を県知事、検事、署長、予審判事へ電報で訴えたため、二カ村が搜索されたという話がで、これを聞いたパーヴェル・アンドレイイチは傲然として、盗まれたは自分のところ、電報をうったのも自分だが、それは告げ口が好きなからでも、腹を立てた

からでもない。自分はあらゆる問題をまず原則の側からみることにしている。盗んだものが飢えたものであろうとなかろうと、法律にとつて差別はない、といひはなつ。

ここで、われわれ——つまり読者は、パーヴェル・アンドレイッチの口から「二人は性格が合わぬ」と説明され、その原因を主としてナターリヤの側に帰している。互に意識的な無関心を装ったおそろるべき冷やかな対立が、むしろ、より以上に、同席するものに息苦しさを感じさせるかれの「性格」に原因があることを知るわけだ。事実、ナターリヤはかれの言葉をきくと、さっと顔を赤らめ、冷静を装おうとするものの、こらえきれず、吐き出すようにいう。

世の中には、飢饉でも他人の悲しみでも、ただ自分の邪悪な、つまらない性格を吐きちらすためだけにあると心得ているような人があるものですね……わたくしの申したいのは一般的なことですけど、世の中には、同情なんて感情を全然もたない、完全に冷淡な人がありますのね。そのくせ、その人たちは、自分をぬきにして事の片づくのを恐れる心から、人の悲しみを見すごしにできないで、なくもがなの干渉を致します。そういう人たちの虚栄心にとつてはなにひとつ神聖なものはないのです。

ひとたび二人の間にかげられようとした橋が落ちてしまうと、二年間のあいだ平静を装った憎悪のうちに鬱積していた彼女の言葉の数々が、事毎に鋭利な剣となつて、かれの心臓部をぐざりと刺す。

あなたは立派な教育のある、育ちのいい方で、非常に潔白で、まっすぐで、はっきりした主義をお持ちですわ。けれど、あなたではそうしたことがみな、あなたのいらっしやるどころならどこへでも、一種息苦しい気分や、圧迫やなにか大変人を侮辱するような、見下げるようなものをお持ちこみになる結果になるんですわ。あなたは立派な思想をお持ちなので、そのため世界中のものを憎んでいらっしやる……

一体道徳とか法律とかいうものは、若い健康な自尊心に富んだ女が、一生を遊惰と憂愁と不断の恐怖のうちに送り、それに対して、食事と住家とを、愛してもいない男から受けねばならぬようにできているものなのではないでしょうか。また、

あなたは鉄道や鉄橋は立派にお作りになりますわ、けれど、飢えた人たちのためにはなんにもおできになりませんわ……あなたが心を悩ましていらっしやることは、わたくしだって知っていますわ。けれど、それは飢饉や同情とはなんの関わりもないことですわ。あなたの御心配は、飢えた人たちがあなたのお助けを借りないですみ、自治会はじめ一般の救済者が、あなたの指導を仰ごうとしていないからですわ。

もちろん、そういわれれば、パーヴェル・アンドレイッチにもいい分はある。

世間には……天使のような性質をもちながら、その立派

な思想を表現する段になると、果して天使かオデッサの市場の物売女か、見分けのつかないような人もいるからね。

……こうして困難複雑な、しかも責任の重い救済組織と見のがすわけには行かない。君は女で、無経験で、実生活にうとく、あまりに信じやすく、感情に走りやすい。君は自分でも全然知らない補佐役たちに囲まれています。こういう状態では、君の活動はきつと、次のような二つの悲惨な結果をもたらすに違いないといつても、決して誇張にはなるまい。第一にわれわれの郡は完全になんの救済も受けられない羽目になるだろうし、第二には、君自身および君の補佐役たちの過失によって、君は自分の金ばかりでなく名譽まで投げ出さなければならぬ羽目になるでしょう。浪費や怠慢はかりにぼくが償うとしても、君が、したがってぼくが、この事業で二十万ルーブリ儲けたなどという噂が立つたとき、君の補佐役たちが果して君を助けにきて呉れるだろうか。

のみならず、かれは、ひとが妻のナターリヤを、骨も折らず気もまず今では郡内第一の人物になってしまった。真の人物になると自然にこうなる。「林檎は実をならせるために別に気を揉む必要はない」といってほめ上げると、「無関心な人間は気なんか揉まない」という。パーヴェル・アンドレーイチは妻にうしろめたさを感じているし、どうみても分はかれの側にない。作者は「妻」の口からばかりでなく、友

人のイワン・イワーヌイチや郡医のムッシウ・ソーポリ(黒貂)の口を借りて、かれを窮迫する。

君を尊敬することは不可能ですよ、君。ちよつと見は君はいかにも人間らしい……君のいうことは高尚だし、君は聰明だし、官等からいっても、君にはちよつと手が届かない。しかし君、君の魂は本物ではないんですよ、……魂に力がありませんよ。

……こう申しては失礼ですが、かりにこの蕎麦粥をですな、よく考え、観察し、分析してみるとします、するとどうです。それはもう人生でなくて、芝居小屋の火事なんです！

もはや、パーヴェル・アンドレーイチ個人の「性格」の問題にとどまるものでないことはいうまでもない。チェーホフは、十九世紀後半における西欧文明との楽しい接触においてロシアがいやが応でも突き当らざるをえなかった問題をとりあげたのだ。とりわけ、ヨーロッパ的——正確にいえば近代ヨーロッパ的——教養と知性を奇形なかたちで身につけたインテリゲンツィアの歪んだ姿を。意識的な関心が、往々にして無関心以上に、現実との間に冷やかな壁をつくってしまうことを。しかも、それは、特殊にロシア的な農村における飢饉の発生という事態に対して有効に対処しえないばかりでなく、妻との間にさえ冷やかな対立を持ち込む。チェーホフは『手帖』のなかでも書いています。「われわれの自尊心や自負心はヨーロッパ的だ。しかし、発達程度や行動はアジア的

だ。」もとよりチェーホフはいわゆる「西欧派」でもなければ「スラブ派」でもない。むしろ、両派が両派として分離し対立し、凝結する事態そのものを問題としているのだ。同じく『手帖』のなかで書いている。「愛。それは昔は大きかった何かの器官が退化した遺物か、それとも将来何か大きな器官に発達すべきものの細胞か、そのどちらかである。現在のところそれは、満足な働きをせず、ひどく期待はずれな結果しか与えない。」

X

「現在のところ満足な働きをしなくなった」愛——『隣人たち』（一八九二年）のヴラーシチは、周囲の反対を押しきって親友ピョートル・ミハイリッチの妹、若い娘のジーナと「自由恋愛」に陥入り、憤慨してかれのもとに馬をとばしてきたミハイリッチに向つていう。「……人間のあらゆる真剣な一歩が何人かを悲しませるのは避けがたいことなんだ。もし君が自由のために闘うようになれば、これまた必ずや母上を苦しめるに違いない。どうもやむをえないのじゃないかね！ 自分に近いものの平和を何より高く評価するものは、思想的な生活なるものを、全然拒絶しなければならぬだろう……。」「一種の靈感みたいに起つてしまった」ジーナとの関係を正當づけるものとして、いかにももつともらしい言分である。しかし、このヴラーシチたるや、詩や絵画を「日常の問題に答えない」からというので認めず、音楽にも心を

動かされないような男である。「かれは自由主義者で、那では赤とみられているのだが、こんなことまでかれにあらうと屈になつてしまふ。かれの自由思想には創意もなければ感激もない。反抗するにも、憤激するにも、喜ぶにも、かれは何時と同じ調子で、不活潑で非効果的である。」「かれは、やれ土地共同体だの、家内工業の振興だの、酪農の設立だのと、きまり文句の、飽き飽きするような会話をはじめた。その話がどれもこれも似たりよつたりで、まるで生きた頭から考え出すのではなく、機械仕掛で用意してあるかのようである。」そこにあるのは「ただ退屈と生活上の無能」だけであり、「かれの自己犠牲並びに、かれが偉業とか公明な衝動とか名づけていたことはすべて、無益な力の浪費、非常に多くの火薬を費消する不必要な空包射撃のように思われた。」

おそらく九十年代のナロードニキのなれの果ての姿はこうだったのであらう。ナロードニキのなれの果てといえは『隣人たち』とほとんど同じ時期に書かれた『無名氏の話』（発表は一八九三年）もまた、ナロードニキ的テロリストの末路を描いた作品である。

主人公たる革命的テロリストは、自分たちの重大な敵と考えられる有名な老政治家の政策や意図を詳しく知り、かれを殺害する機会を見出すため、その息子である一官吏ゲオルギー・イワースイッチ・オルロフの家に下僕として住み込む。が、老政治家殺害のまたとない機会がやってきたとき、かれつまり「無名氏」は、この老人に対して憎悪にもえるどころ

か、一人の年老いた人間として憐れみすら感じている自分を発見する。「わたしは自分をせき立て、拳を握りしめて、以前の憎悪をせめて一滴でも自分の心から絞り出そうと努めてみました……しかし、脆い石でマツチを擦りつけることは困難でした。年老いた悲しげな顔と「制服につけられた」星章の冷たい光とは、わたしの心にただ地上一切のものとはかなさや、急死などに就いての、くだらない安価な、ろくでもない想念をよび起すにすぎませんませんでした……もはや疑うことはできませんでした——わたしの裡に変化が起ったのです。わたしは別人になってしまったのです。」それというのももそのときすでに、かれの関心はテロリズム以外のものに向いてしまっていたからだ。かれはゲオルギー・イワーヌイチの家で、純粹でひたむきな愛情をもった美しい一人の女、ジナイーダ・フョードロヴナが愚弄されるのをみてしまった。彼女はオルロフを、信念に反して役人勤めをしている「思想の人」と信じ、低俗な出世主義者たる夫のもとをとび出してきたのだが、もともと彼女を往きずりの情事の相手の一人位にしか考えていないオルロフは、彼女が自分の裡に一步も立入ることも許さず、彼女の「持ちまへの純な心」を冷笑し、そして彼女を残酷に苦しめる。しかし、彼女の期待を裏切ったのはオルロフばかりではなかった。彼女は、彼女に對するあまりの仕打ちに自分の身を明かし、オルロフの行状を非難した置手紙をのこして邸を立去ろうとする「無名氏」、ウラジミール・イワーヌイチのうちに真正正銘の「思想の

人」「普通の尺度では測れない特別な種類の人間」を見出したと思つた。かれが革命家として「破産」してしまつたことも知らないで、彼女にとってこの第二の幻滅は致命的であつた。ジナイーダはウラジミール・イワーヌイチに向つていう。

……あの人（ゲオルギー・イワーヌイチ・オルロフ）は臆病で、嘘つきで、あたしを騙しました。それはそうですけれど、ではあなたは？ 大変露骨ないい方で失礼ですけど——あなたはどうですか。あの人はペテルブルグであつたしを欺いて運命のままに振り棄ました。が、あなたはここ（ニース）であつたしを欺いて、棄てました。でも、あの人は思想まで欺瞞の巻添えにしませんでした。それなのにあなたは……

彼女は、オルロフの兇を生んで間もなく、毒を飲んで自殺する。「無名氏」の憎悪の生活から愛の生活への変貌も、所詮はオルロフに手を貸して、一人の若い、美しい女性を、その希望を扼殺する結果となつた。二人は共犯者であり、同類であつたのだ。オルロフと「無名氏」がともにイワーヌイチであることに、チェーホフの、時代の現実に対する深い洞察がノン・サンスな無気味さのうちに鋭く示されていはいはしな

いか。

共犯者といえ、『中二階のある家』（一八九六年）のリーダと画家も共犯者ではないか。リーダもナロードニキ的な社会事業家だが、ここでは彼女の若さがその退廃を救つてい

る。村の自治会小学校の教師である彼女は、幌馬車を駆って焼け出された人たちのために義捐金を集め、病人を治療し、村中歩きまわつてパンフレットを頒布する……といった活動家である。彼女は画家に敵意を感じている。かれは風景画家で「民衆の窮乏」を描かず、彼女の堅く信じていることに無関心であるばかりか、「医者でもないのに百姓を治療するのはかれらを欺くものだから、二千デシヤティーナの土地を持つていけば、慈善家になるのもわけはない」などと彼女に毒づくからだ。二人は診療所のことでもいいあらそう。

「先週お産のためにアンナが死にました。けれど、もし近くに診療所があったら、あれも死ななくて済んだでしょう。風景画家の皆さんだって、こうしたことになにか信念がなくてはならないと思います。」

「はばかりながら、ぼくはその点について、きわめてはつきりした信念をもっています。……アンナがお産で死んだことが大切なんじゃないやありません。すべてそうしたアンナや、マーヴラや、ペラゲーヤが、朝早くから暗くなるまで背を曲げて力以上の労働のために苦んだり、生涯飢えて病気をする子供のために顛えたり、生涯死や病気を恐れたり生涯治療をやったり、早くしぼんだり、早く年をとったり、不潔や悪臭の中で死んでいたりするその事実ですよ。かれらの子供は少し大きくなると、さっそくもう同じ音楽をはじめます。こうして何百年という年月が過ぎ、幾十億という人間が動物にも劣つた生活をしているのです。……あ

なたは、やれ病院だそれ学校だと言って、かれらの救済を考えていられるが、しかしそれだけではかれらを輓から解放するわけには行きません。むしろ反対に、奴隸化に拍車をかけていられるのです……」

「……そりゃもちろん、あたくしたちは人類を救つてはいませんし、あるいはまた、多くの点で間違っているかも知れませんが。けれどあたくしどもは、自分たちにできるだけのことはしているのですわ。その点であたくしたちは正しうございます。もっとも崇高な、もっとも神聖な文化人の使命——それは近きものへの奉仕ですわ……」

この二つの立場の対立は、おそらく当時のロシアにおいて切実なものだったに違いない。二人は一步も譲らず、村ではもう酒場の亭主も、馬泥棒も穩かに眠っているのに、二人は互に苛だち合い、ますます溝を深めていった。二人の間を結びつけていたミシユースを、二人の間から、そしてこの村から立去らせることになるのを知らないで。リーダの姉のジェーニヤは、子供の頃に女の家庭教師を「ミシユース（ミス）と呼んでいたところから、少女のようにミシユースと呼ばれていた。相当な財産があるのに二十五ルーブリの月給で自活していることを誇りとし、家のなかでも個室におさまった船長のように別格扱ひされていたリーダと違って、彼女は、なにごとにも控え目で、内気で、素直で、魅力的な娘であった。「ミシユース、おまえはどこにいる」との画家の言葉で結ばれているこの作品の抒情性の背後には、リーダの主義が立去

らせ、画家の思想がとりながしたもののへの憧憬がある。

こと新しくいうまでもないが、現実において遮断され、望みの断れたところに憧憬は成立する。したがって、憧憬のはげしさは、現実での達成を近き将来に予感するというよりは、達成の可能、不可能を問わず現在のうちに安んずることのできなくなった「苛立ち」を示すものではないか。焦燥反応といってもいい。チェーホフの晩年の作品——ここではとりあえず小説——にみられる、うらはらな暗さと明るさの混在を解く一つの鍵はここにある。

『すぐり』（一八九八年）のイワン・イワノヴィッチは、生涯すぐりの木のはえた地主邸の「旦那」になることを夢み、ついにその夢を実現した弟ニコライが、はじめて自分の家だとれたすぐりを貪るように食べて幸福感にひたっているのを見たとき、突然苛立ちを感じた。

わたしは人間の幸福について考えるとき、いつも何か憂うつなものが混ってくるのですが、今この幸福な人間をまのあたりみて、絶望に近い重苦しい感情にとらわれました。……この世の中には満足しきった幸福な人間がどんなに多いことか！……強者の傲慢と怠惰、弱者の無知と畜生のような生活、どちらをみてもやりきれぬほどの貧乏、狭苦しさ、墮落、泥酔、偽善、虚偽……それでいてどこの家も街頭も平穩無事なのだ。

かれは翌朝早くニコライのもとを出発した。そして、それ以来街の生活がかれにとって堪えがたいものになった。平安

と静寂が胸をしめつけ、人家の窓をみるのがおそろしかった。

いまわたしにとって、食卓を囲んでお茶を飲んでいる幸福な家庭ほど重苦しさを感ずる光景はないからです。……幸福なんてものはありません。またある筈がないのです。もし人生に意味や目的があるとすれば、その意味や目的はわれわれの幸福のうちにあるのではなく、なにかもっと合理的な、偉大なものうちにあるのです。

また、『つとめの身』（一八九九年）の若い予審判事ルイジンは、自殺死体解剖のため医者と一緒に村にやってきて、暗い悲惨な百姓たちの生活、保険代理人の自殺、何十年となく雨の日も風の日も郵便物を配達して歩く老人などをみて、重苦しさが心にうっ積する。しかも一方には、まるでうそみだいに暖く、快適な地主の生活があるのだ。かれは地主の家に宿をとるが、そこでかれは奇怪な夢をみる。自殺した保険代理人と郵便配達の人とが、びったり身体をくっつけて、助け合いながら雪の積った畑を歩いて行く。吹雪がかれらの頭上で逆巻き、風が背中まで吹きこんでくる。しかし、かれらは歩き続け、合唱し続ける。

歩け、歩け、歩け、歩け。

……

歩け、歩け、歩け、歩け、あなた方は暖く明るくて気持よからうが、われわれは行く。極寒のなかへ、吹雪のなかへ、深い雪を踏んで……われわれは人生のあらゆる重荷を

背負って行く。自分の分もあんな方の分も……う、う、う、う！ 歩け、歩け、歩け、歩け……

……自己の運命に従順な人たちが、人生においてもっとも重いもの、暗いものを背負って行くという事実にあ協してしまふ——それはなんとおそろしいことだろう！ それと妥協してしまふこと、そして一方では自分のために幸福な満ち足りた人たちと交って華かな生活をしたいと望み、年中そんな生活ばかり夢みている——それはつまり労働と苦勞とで押しつぶされた人たちの新しい自殺を空想することになるではないか……するとまた——

歩け、歩け、歩け、歩け

まるで誰かが小槌で顛顛を打っているようだ。